

渋谷から西へ走る私鉄の、昭和もごく初期の頃に開かれた住宅地、当時はまぎれもない郊外で、それぞれの敷地、道幅にゆとりがあり、その以前は畑だったのだろうが、庭木太しく枝ぶりおおらかに、駅を少し離れれば、昼も人影をあまり見受けない。私がこの町の外れに移り住んだのは十三年前だが、住いの様式などに知識も、また興味もないにしろ、あたりを散歩しながら見受ける家並みの、和風にとってつけたような洋間の張り出していたり、バラの生垣、煉瓦造りの煙突、夏・冬それぞれにくくばりおこたらぬ古い温室、当主らしき姿を見かけることは稀。ごくたまに眼にすれば、これもいい歳の、息子の嫁であるう女に支えられつつ植木屋の仕事ぶりをながめてい、その服装は思いがけず今風、一族の寄合いでもあったのか、老若男女門に群がる中央に、老夫妻がいて写真を撮っていたりもする。なにやら覚えのある表札の名前に、紳士録を調べてみると、いずれも古い時代の代議士やオリンピック馬術の選手、新聞社の名文記者、中に侍従などもいて、生れはたいいてい前世紀の末。当然、葬式がよく出て、街灯に照らされた道筋、ビニールをかけられた花輪がならび、何某家と記された提灯、あわただしい弔問客の車、私のぶらぶら歩きは、しばしば通夜の、ふだんからみれば一種の賑わいに行きあつた。

葬家の古い表札は一年ほどそのまま、これが外される頃、しばしばそれまでの住いの建て直しが行われる。浮世のしがらみお上の取決め、財産相続にまつることなのだろう、敷地を分けて、奥に今風の二戸建て、道に面して空き地。空き地に、ハイムの、ヴィラのと仰々しく銘打った白または褐色の洋風長屋が建ち、せせこましいながら、すべて半地下の駐車スペースを持つ。葬家に限らず、木造家屋の耐用年数を過ぎたのか、旧を打ちこわして新築の家も、

特にこの四、五年流行り病いの如く、普請の掩いが払われてお目見得するほとんどがプレファブで「円」は栄える家並みは痩せる。そして、いったん建ってしまうと、以前のたたずまいを思い出すことができず、いかに暇つぶし、いや、これは自分なりの納得、ただ家に居たくないという、不逞の外歩きにしろ、私はこれまで何を観ていたのかと、心許ない気持になる。駅まで十分足らずの道のりに、いつも数カ所の、空き地、建築現場があり、引越して来た頃と較べれば、ずい分町のながめは変わったのだが、たちまち慣れてしまい、ことさらな感慨もない。

開く時に配慮したのだろう、都心部のせせこましいそれとは規模の違う、児童公園が三つあって、ボール遊び犬同伴は厳禁。いずれも砂場、ベンチ、屑籠、公衆便所が備えられ、陽のある内、若い母親が子供を遊ばせる、道に面して櫂、银杏、桜、椎の木、近道として斜めに横断する者の他、ふだん、公園の中央はガランとしらじらしい。

疲れるほど歩くわけじゃないが、ふとここへ入りこみ、ベンチに座ることもあって、たいいてい自動販売機で求めた缶ビールを手にし、なるべく母子連れからは遠くいる。神社の境内、公園、キャベツ、里芋、ねぎなど、おぎなりに作っては打ち棄てる畑もまだ残り、こういう場所に痴漢が出ると、区のお達しがよく届く。昼日中のビールは、ママたちの目障りに違いない。私とその女とベンチで一緒になったのは、といっても一つ置いて隣りに、気がつくと居たのだ。

歳の頃四十半ばか、秋の初めで、場所にふさわしくないグレイのスーツ、濃いめの化粧、「あたしくし、どうしてここにいるのか、御存知？」聞きようによつては、薄気味の悪い台詞を口にし、「お信じにならないでしょうけど、向うで遊んでる、あの帽子の男の児、私の子供なの」みれば砂場に三人のママ、同じ数の子供、「事情がありましたね、外へ出たんですけど、やっぱり気になっちゃって」淡々という。返答に窮し、曖昧にうなずいた私に、女は笑いかけ、こちらのベンチへ移って、「三歳になるんですけどね、来年は幼稚園で、まあ元気に育ってくれてるみたいだし」髪に脱色の名残り、持物はグリーンのハンドバッグ、茶色の紙袋、なれなれしいも

のいいに、保険の勧誘、信仰関係さらに軽い躁病かとみなし、女の話は、その自ら認めるように、かなり突拍子もない。「あたくし亭主運が悪うございまして、現在の主人が三人目ですの。もつとも最初の連れ合いは、親のいいなりで、なにしろ堅い家に育ちましてね、学校は女子校、学生時代に家同士で婚約を決めちゃって、商社勤めの五つ上で、卒業するとすぐ結婚、親友が若さを謳歌しているのに、あたくしは主婦業で」私は、当然といえは当然、そつけない表情だったと思うが、女いつさい斟酌せず、さらに立入った打ち明け話。今時珍らしいプラスチックのケースに納めた煙草をとり出し吸いつけて、「御存知ないかしら、今年、十九回忌になるんですけど、赴任先きのアルゼンチンで亡くなりました。自動車事故、正面衝突でしてね、日本人三名、現地人四人が死にました。新聞にも大きく出ましたのよ」しゃべりつつ、女の視線は帽子の子供の動きを追う。「よろしかったら」女は、ポテトチップスを二人の中に置き、カップ入り酒を手にした、駅前店で求めたもの、紙袋に覚えがある。秋とはいえ強い日差しの日下り、穏やかならぬふるまいだが、私も缶ビールを手にしていて、実は三本目、二本買ってもの足りず、さらに二本追加したのだ。事情があつて、いわゆるキッチンドラッカーになりかけているのか、むしろ相憐れむ感じが生れ、以後、女の話素直に聞いた。

事故死した主人の遺児、三歳の娘をかかえ、娘のために一生を棒にふる気はまったく無かつたという。「あたくし二十六になったばかり、同級生の中にはまだ未婚の人がいくらもいたし、主人の実家は、御存知ありません？ 芝で金庫を扱ってる老舗。義父も健在でしたけど、義兄が跡を継いで、今時、金庫なんて時代おくれみたいですけど、やっぱり神棚みたいなものらしいのね、需要は増える一方。主人の生家は代々木でして、春はお花見のできるほど桜の植わった広い庭の住い、あたくしどもは代官山のマンションでした。主人の死後そこを戴いて、子供は義兄の籍に移しました、義兄のところは上二人が男で、女の児が欲しいって。おかげさまでずい分かわいがられて、女のくせに理科系が得意とかで」名門女子大の数学科に進み、大手コ

ンピュータ会社に就職が決っているらしい。「四年と少しの短い結婚生活でしたけど、やっぱり記憶に深く刻まれていますわ。ハニムーンはアメリカへ参りました。主人、シカゴ大学の経営学部出身でして、ニューヨークから母校の地をたずねて、あれは夏の終りの頃。マンハッタンの暑さが嘘みたいに、ミシガン湖からの風がさわやかで」現在について女は触れなかったが、昼日中の公園でコップ酒啜りつつ、自分の腹を痛めた子供の遊ぶ姿を、遠くからはばかりつつ眺めるといふ、新派悲劇風立場とはうらはらな、昔嘶しを、相変らず抑揚の少ない語り口でしゃべり、それは、結婚した年の暮に懐妊の兆しがあつて、万事アメリカ仕込みの主人、会社に掛け合い、長期出張は拒否。のみならず「ラマーズ法のハシリじやなかったでしょうか、御存知ありません？ I病院、あすこでもどもも出産についての講習を受けました。大きなお腹で泳いだし、ダンスパーティ、コンサートへ出かけて。産前産後の五日ほど、主人は病院から出社しましたのよ、院内家庭分娩でいいましてね、主人、実家の母も泊れて」女兒出産の後も、主人は家を留守にせず、どころか当然のつき合いも断つて早くに帰宅。出世に障りはしないかと、女は心配したが、子供に較べたら、何十何百億の取引きも空しいといい、真面目に「ありがとう」と女にくり返しつげ、「でも夫婦は夫婦で、娘をどつちかの親に預けて、旅行を楽しみもしました。あたくしが学生の頃、『こんにちは赤ちゃん』て歌がはやって、あの中に、『時々パパと、二人っきりの、静かな夜を、おねがい赤ちゃん』てありますでしょ、あれ思い出して、あたくし幸せなんだなとしみじみ。でも、離しちゃったんですものね」「そりやまあしかし、お嬢さんのためにもその方が」相槌だけ打っていた私が、ようやく言葉らしいものを口にした時、女は、ふと体を前のめりに彼方をながめ、釣られて見ると、帽子の男児とママが帰途にくところ、「なんだかおしゃべりしちゃって」女、二本目のカップを顎しゃくり上げるようにして飲み干し、どちらも手をつけなかったポテトチップスをそのままに立ち去った。ノッケは、少し無気味だったが、その話に特別ひっかかりを感じないまま、男の児の父は、女の三人目の

亭主らしいから、中に一人いたはず、しかし、初めの娘と別れ、末の子供との間が今のようなら、子供運も悪いわけで、そのいきさつを知りたい気持があった。言葉づかいは丁寧だが、身なりはどこことなくちぐはぐ、なにより昼酒、あまり恵まれていないように思える。私はなおしばらくベンチに居て、これは妻の手前をはばかり、酔いを醒ますため。帰り道、家から出直したらしい件の母、変らず子供の手をひく姿と行き合い、まこと屈託のないママの表情で、ただ、その若さが奇妙、夫婦どちらが疑わしいのか、不妊と決めこむには早過ぎるように思えた。

以後、公園のかたわらを過ぎる時、植えこみ木立ち越しに公園のベンチ、砂場ふと気になったが、かりに女の姿を見受けたとして、億劫さが先きに立ち、声はかけなかったろう。かなり風変わりには違いないのだ。二月後、家から五分の古い街道沿い、五つ並ぶ寺の一つに入りこみ、掃苔家のつもりはないが、表面の風化した墓の年号を判読、西暦に換算してみたり、また昭和二十年三月十日を命日とする名前が一つ石にいくつも刻まれていれば、それぞれに想いは浮かぶ。迷路の如き墓と墓の間を縫い、建て替えてこれもプレファブ風山門を出ると、私の勝手な思いこみだろうが、通行人の中に異彩を放つあの女が、歩いて来るではないか。「やあ、今日は」反射的に挨拶し、女は、私を認めて無表情ながらどきまぎした感じ。「先日はどうも」言葉が続かず、私もぎこちなくなった。「すっかり涼しくなりました」ひとと私に注目しつつ女がいった。「私の家はこの近くなんですが」「はあ、さようでらっしゃいますか」「お茶でもいいかがです、お急ぎですか」「はあ、恐れ入ります」家へ招くように受け取られかねなかったが、私は先きに立って、寺と寺の間の喫茶店の戸を開け、ついて来た女は、「ここの床、あたくしのとこのキッチンと同じ」とつぶやいた。「私はビールにしますが、ここお酒はどうかな」「同じもので」依然、話のきつかけはつかめぬ、女は紫のラメ入りタートルネックセーターに茶のスカート、赤いやや大ぶりのバッグ。グラスの底に左手を添えてビールを二口で飲み干し、「あたくしども今度引越いたしますの」こちらの気持みすかしたように、また、聞き手を得て勢いこむ如く、「今

の所も買物の便が良くて心残りなんですけど、二軒持つゆとりもありませんし、少し遠いんです。娘のお稽古に通わせるのがたいへんで、御存知ありません？ 娘、時々TVに出るんですよ」名前をつげたが、私は知らない。「御存知ありません？」が口癖らしい。初めの亭主との間に生れた娘は理科系、そして女のいう、どうやら芸能志向の女兒は二番目の主人のタネで、彼は東北出身、刻苦^{こくく}勉強^{べんれい}の功成り国際鑑定士の資格を持つ宝石商。「御存知でしたか、上野から御^お徒町^{からまち}の近辺宝石屋さんが多いんですの。うちのも小さなスペースを借りて始めたんですが、一緒になって三年目でしたわ、四階のビルを建てました。彼も海外へでることが多くて、イスラエル、南ア連邦、オランダ。ダイヤモンドより、キャッツアイ、サファイア、アレキサンドライト、ルビーなどが専門で、あたくし前を外地で亡^なくしてますから気懸^{きが}りで、ちょっとノイローゼになって。変なものですわね、万引きなんかしちゃって」話は前後したが、女は初めの亭主の死の後から語り、代官山^{だいかんやま}の部屋を人に貸し、自分は生家へ戻^{かえ}って気儘^{きまま}に過^{すご}すうち、誘^よわれて出かけた軽井沢のゴルフ場で、二番目と知り合った、「ファーストインプレッションは田舎臭いオジンでしたけど、若いうちから世界を駈^かけめぐって、そりや話題が豊富、紹介されました時、仕事の方も軌道にのって、私の学生時代の友人が、彼の、まあお金でしょうけど、惹^ひかれてたらしいんですけど、わたくしが奪^とったみたいになりました」学生時代をことさらひけらかすと、私は少し意地悪く聞いた。「殿方^{とのがた}にこういうのは当てはまらないかも知れないけど、婚期^{いづ}を逸^いしたって申しますか、あたくし二十七で主人は四十二の初婚。それも無理はないと、後で判りましたが、女ばかり四人の末で、お母様がお丈夫、義姉たちの連れ合いは、あまりパツとしてなくて、弟が一族の出世頭なのね、住いは九段坂上と飯田橋の間で、年中、主人の身寄り^{みより}が居て、それで、御徒町のビルが出来ると、三・四階へ移りました。もう娘が生れてまして、義母と出戻りの義姉の一人があたくしに触^{さわ}らせないんですの。主人が見兼ねてね。子供の先きを考えれば、九段の方が文教地区でよろしんですけど」三階はダンスパーティーもできる広

さの洋間とDK、四階に寝室、それぞれの部屋、二番目の亭主の趣味はクラシック音楽鑑賞、美術品収集、油彩ではなく早くからリトグラフに目をつけ、シヤガール、ビュッフェのごく初期の作品を持っていたという。商売がらみだがよく寄り合いを開き、料理はそのつどコックを招く、「ちよつとした社交場でしたわ、室内楽団を入れたり、でも浮つ調子のよう^{うわちようし}でいて、主人は家庭を大事にしました。子供時代、恵まれなかったせいか、布団屋さん^{ふとんや}だったんですって、戦時中は景気がよかつたらしいんですけど。ちよつと成金趣味でしたわね。あたくしも色んなわがままいって、移り気なのねあたくし、デコパージュ、ペーパークラフト、お三味線、あたくしの覚束ない撥捌き^{おぼさき}に喜んじやって。でも娘のピアノにはかないません。主人は朝、ベッドの中で娘の弾くシヨパンを聴くのが、昔からの理想だったそうで「東北出身だが、江戸前のそば、鰻^{うなぎ}、天麩羅に目がなく、よく食べ歩き、映画館寄席にも出かけた。「コンプレックスがあったのかしら、それとも外国へ出かけて日本的な文化に惹かれたのでしょうか」見かけにこだわってはいけないと思いつつ、髪の色部分は目立たなくなっていたが、まずはうつちやりっ放し、ラメ入りセーターで、シヤガールの、文化のといわれるとなにやら奇妙な印象。特にひけらかしているわけでもないのだろうが、娘にピアノの他、バレエ、日舞を習わせ、肉親と義理の客ばかりの、その発表会に合わせて、主人は日本へ戻って来た。「お子さんはお嬢さんだけ？」私がたずねると、「いえ、すぐ後に双児^{ふたし}の男の子ができました、一人は亡くしました。あたくしの不注意ということで、残りの方は、後継ぎのわけですから、義母義姉がやって来て、引つ攫う^{さら}ように九段へ連れてって」女は、双児の片方に死なれたことがショックで、自信を失い、主人の肉親に息子をゆだね、彼は九段の名門男子校へ入った。娘を学習院へ進めたかったが、幼稚園の面接ではねられ、「上野近辺の宝石屋がいけなかったんでしょうか、主人は怒って、副都心のビルに店を出しました。宝石というより宝飾品の大衆化を考えて、当りました、でも」その無理がたたり、体力に自信のある主人が、疲労を訴え黄疸^{おうたん}が出た時、実は胆管の癌^{がん}が

肝臓にも拡がっていて、死期を指折り数える状態。「あたくし世間知らずに思われたらしくて、主治医の先生は、正しい病状を義母義姉に告げて、あたくしには胆石に肝障害とだけ」もとより主人は知らない。入院一月でいったんは自宅へ戻り、「主人も五十半ば、これからはのんびりしようって申しまして、まあ海外へ出かけるのは、先生に禁じられてましたし」所詮は主人が創り育てた商店、難破を予知して逃げるネズミのように、見込みのある子飼いが、顧客を連れて独立。それでも主人さえ生きていれば、先き行き何不自由ないはずが、後で聞かされたのだが、医師の判断よりは半年おくれ、足の浮腫で再入院。三日後腹腔に大出血が起こり、女は事情のみこめぬまま、臨終の直前、義姉の一人の連れ合いに、絶望の旨知らされた。この間一族出世頭の死が近いとなって、主人の肉親はあれこれ策謀、「結局、御徒町に娘と二人お情けで住まわせてもらってるような。お店の経理担当と組んで、あたくしよく判りませんが、印鑑を勝手に使ったらしいのね。主人の遺産は無くなっちゃってるし、あのビルも担保に入ってますして」女は、涙金と引替えに御徒町を引払い、代官山へ戻った。「娘にみじめな思いさせたくありませんから、働きに出ましたのは」主人の知り合いの伝手で、新宿のバア代理マダム。「主人に連れられて、よく銀座のクラブへは参りましたが、まったく未知の世界」この時が四十。娘一途に賭けて、片親、しかも母は夜の勤め、世間様に後指さされぬよう女は頑張った。「こうみえて体は丈夫ですし、気も強いところがありますの。世間知らずだからかえってがむしやらになれたのかも」芸能人の多く通う中学へ入った娘も、急速に大人びて、「どうしてもおろそかになつてしまう家事一切、娘が受け持って、ただでさえ学校の他にお稽古ごとがありますでしょ、そこへ主婦代り。でも、よく母子家庭なんて、暗いイメージで受け取られますけど、お互いいたり合って、母親の私がこんなこというのはいけないでしょうけど、たよりになりました。少し酔って戻った朝、魔法瓶のコーヒー、胃薬などが枕元にあったり。これも親馬鹿ですが、天分はあるようです。バレエ団で未来のプリマと太鼓判押されてまして、日舞の方でも、芸者

衆の間で評判、姿が良いって、これだけは持って生れたものだそうで」小瓶だったが、二人で十数本を空け、女は淡々と、しかし休みなくしゃべる。一年後、女は三番目の、現在の主人と結婚、二十歳上の台湾二世。渋谷からの私鉄の終点駅近くで、料理店を経営する。「責任逃れじやありませんけど、お店に紹介して下さった、前の主人の知合いが強く奨めて、歳はとつているが人柄は良いし、生活も安定している。今は気が張っているにしろ、夜の仕事はいつの間にか無理、ストレスでしょうかしら、それが、積もって、もしママが倒れたら娘さんどうなるっていわれて」「その方にお子さんは？」「三人、みな立派に独立なすってて、一人はお医者様、後はサラリーマン。奥様を三年前にお亡くしになっていて」歳よりずっと世間を心得る娘はママが良ければと、動揺の色もなく、「代官山は御存知のように、ずい分高くなっていて、よほど処分しようかと思いましたが、色々想い出のある住いですし、また人に借りて戴いて」終点駅から、中央線に乗り替え四つ先きの、台湾人の家に娘ともども移り、すぐ妊娠。「あたくし中絶のつもりでしたが、主人は反対で、ただ自分の年齢を考えると、育てる自信がない、遠いつながらだが一族の中に、養子を熱望している夫婦がいる、その奥様は、若い身空を筋腫で、子宮をとつてしまい、産めない身体。そこへもらってもらおうと、たしか、主人の祖母の生家へ嫁いで来た方の孫のお嫁さんの妹夫婦、国籍は日本で」「この前、あなたが見守ってらした方」「ええ、すべて主人が、差配さはいしまして、生後三週間目、あちらへ参りました。先様は私について何も御存知ありません」「時々ああやって」「いえ、ごくたま。お家の近くまで参りまして、逢えるときまったものじゃありませんでしょ、本当にこの前は偶然」娘の日舞稽古場は赤坂、バレエが青山、ピアノは練馬、通う高校は新宿、「上級に進むとたいへんでして、あたくしできるだけ夜は迎えに行くようにしてますけど。主人は車の免許をとれば、あたくし用に一台買ってくれるって、でも、初めの主人が事故で亡くなってますでしょ、かれこれ二十年前のことですのに、ハンドルにぎるのが怖くって」養子にだすことについては、自分中心主義に思えたが、

女も後で考えると、二世とはいえ異国で苦勞したあげくの知恵。主人はやさしい人柄で、娘の稽古ごとに理解をしめし、その行動範囲を勘案して、四谷へ引越しと決った。「本当に申し訳ないような、主人は古いんです、今のところ。庭にも愛着があったでしょうに、あたらしい住いはマンションですから」「亭主運が悪いつて、先だつておっしゃっていたけど、逆なんじゃありませんか。何も一人の男を後生大事ごしよつたいじに守ることはないんだし、それぞれ個性の違う、なによりみんな良い人で」「そうなんです、もつたいないほど。今の主人も、歳の離れているせいでしょうけど、あたくしのわがままを通して、芸能界つてお金がかかるんです、国立小劇場で踊ると何やかや百万以上。おかげさまで、TVにも出さして戴くようになりましたけど」「お子さんにも恵まれてらっしゃる、手許にいなかったって、あなたのお腹を痛めたには違いないんだし」「そうなのね、今度、観てやつて下さいまし、うちの娘」また名をつげ、「大きなスポンサーのコマーシャルに出ると、いっぺんに名前が売れるらしいんですね」最後はステージママ風について、いささかの酔いもみせず、女は前と同じく、断ち切るように去った。私の方は、抑揚のない、また切れ目の少ないそのしゃべり方に食傷しよくしやうした感じ。つまりは「可愛い女」であろう。エリート商社マン、勤勉かつ向上心に燃えた宝石商、そして料理店営む台湾人、連れ合いに身丈みたけ合わせて、けつこう幸せな家庭を築き、子供を産み、手許に娘一人は気の毒な感じだが、他の三人、いずれも血こそつながらぬが、親代りにかわいがられて育つ。女性全般とはいえないが、少なくともあの女にとって、家庭は、いくらでも建て直しがきく、そして過去の、姿を消してしまった家庭について、取りこわされた家屋の如く、よみがえらせようにも手がかりさえ失われてしまうらしい。代官山の部屋とか、初めの亭主の事故に少しこだわりをみせたが、たかが知れている。あの女の家庭とは、いちおうの経済力のある主人と共に暮し、子供を産むこと。女の言葉をそのまま信じたわけじゃないが、三種三様色変る、幸せな妻の座を楽しんだわけで、私は、女のいささか怪態けたいな身なりも、ステージママとして、芸能界に関われば、

あんなものと納得し、その酒は、代理ママの頃に、つい習慣となったのだろう。昼酒とあの口調からして、いくらかの鬱屈うつくはあり、見ず知らずの私をつかまえて、長々しい身の上話も、今の立場では、虚実とり混ぜてしゃべる相手がいないのだ。この点で気の毒じやあるが、とかく女にスタレはないが私の感想だった。

私は、そのまま女のことを忘れてしまった。

しかし無意識のうち、いちおう気にはしていたのだろう、公園のあの母子連れを、時に見受ければ、つい眺め入り、およその住いの見当もついた。連棟式の並ぶ一劃いっかくで、若夫婦には贅沢ぜいたくな住いといっている。今年四月、八重桜のぼつたりした花の、ややくたびれた色合いとなったつまり晩春、あたりでもっとも典雅なたたずまいだった邸宅が、一日で壊され、三百坪はある敷地に、安普請そのもの、平家の寮が出現、新興宗教の若い布教員がかしましく住む。このかわらを過ぎる時、いつも不愉快になるのだが、そこで、母子連れに行き会った。母はマタニテイドレス、膨ふくらんだ腹を突き出し、反そりかえって、いかにも重そうな足どり、一瞬、まじまじとみつめた私の視線を、堂々と受けとめ、ノシノシと歩き進む。子宮をとったはず、妊娠はあり得ぬ。

八重桜の、散りかかる花片を肩に受けつつ、妊婦は角を曲った。その姿からの連想ではないのだが、狸に化かされたような趣おもむきで、しかも納得はある。駅へ向う広い道筋、新旧とりどりの家並みをあらためてしかと見つめ直し、あの女、気候も良くなったし、今頃、またどこかの公園で、ぼんやりベンチにすわる男をつかまえ、「あたくし、どうしてここにいるのか御存知？ お信じにならないでしょうけど」と、しゃべりかけているのだろう、あのディテールの細かさは、出まかせじゃない、何度となく繰りかえし、練り上げたものだ。私のように、ちゃんと聞いてやる相手がみつかるといいのだが。